

追悼・室俊司先生

名誉教授の室俊司先生が2009年9月27日、都内ホスピスの施設でご逝去されました。享年77歳でした。先生が生前「死者は生者を煩わせず」とおっしゃっておられたこともあり、告別式は、30日に施設内のチャペルで家族葬のような形で執り行われました。

室先生は1964年から1997年までの33年間、立教大学に奉職され、その間、総長室長や文学部長を歴任されました。専攻は、社会教育、成人教育で、中野区教育委員の準公選にも指導的な役割を果たされました。

室先生の生前のご尽力に感謝するとともに、心からご冥福をお祈りし、追悼文をささげたいと思います。

室俊司先生を悼む

前田一男

教育学科年報40号の退職記念号で「室先生の学問論」を寄稿し立教からお送りしたのが1997年3月。そして13年後の2010年3月、同じ年報53号で追悼文を寄稿し先生の人生をお送りすることとなった。たまたま退職記念号編集の役割を与えられたのだが、できあがったばかりの記念号を手にとり、今はない読書室で一頁一頁を慈しむように読まれていたお姿を今さらながら思い出す。こよなく立教を愛しておられた先生が鬼籍に入られたのかと思うと、なんともいえない喪失感を感じる。

室先生とのおつきあいのなかで、思い出される話が多い。なかでも、二つの時代への証言が強く印象に残っている。

その一つは戦争体験である。1931年のお生まれであるので、敗戦時、先生は14歳だった。東京大空襲後の死体だらけの下町を歩くなかで死体に無感覚になっていくというお話、小学生にとっては在日朝鮮人の友達も友達にすぎないのに、なぜ大人たちの差別の対象になるのかわからなかったというお話などは、衝撃的だった。ご逝去の報を受けた9月30日、担当科目である「教育史2」の授業で、その意味するところの解釈も含め、室先生から継承されたこの戦争体験を、さらに若い学生諸君に伝えることで、室先生への追悼とさせていただいた。

もう一つは、「大学紛争」である。青年教師の先生が、学生たちの徹底的な告発と追及に真摯に立ち向かわれたご経験である。その過程で、6号館のバリケードを教員たちで撤去したこと、つまりは立教には機動隊を導入しなかったことを力説しておられた。先生が退職される時、「文学部教授会自己批判書集—教授の知的水準を正しく理解するために—文学部共斗会議」というガリ版刷りの資料を、しっかり保存しておくようにと、いただいた。1969年7月のものである。詳しくは紹介できないが、室先生自身、厳しい自己批判を述べておられ、当時の言い知れぬ緊張感が伝わってくるものである。

勝手な思い込みかもしれないが、その二つの体験が、その後の人間や教育に対する室先生の哲学を創った、と思う。そして、その哲学から導き出されてきた姿勢が、「文化」実践であった。

たとえば、文字とその筆跡はその人の文化であり、初等課程をもつ学科の卒業論文はワープロやパソコンではなく、どこまでも手書きで作成されるべきだという主張は定年までお譲りにならなかった。学科の新歓コンパでは満面の笑みで新生を迎えられ、夏の学科セミナーキャンプでは夜を徹して学生たちと語り、春の大学院の院生旅行でも院生との激論を心底楽しまれた。音楽会でゼミ生と歌われていた「青い山脈」には、若き青春時代の哀愁が漂っていた。ルソーの『エミール』にこだわりつづけられ、室ゼミは通称エミールゼミと称された。40歳にならなければ、教育学という学問がみえてこないのだと、人文学、教育学の奥行きを、人間の成熟と関連させて捉えておられた。そのような一貫した姿勢のなかで、たえず意識されていたことは、繰り返しになるが、「文化」を育てるという生き方の哲学だったのだと思う。そのなかでこそ、教育的価値の追求が可能なのだという信念だった。それは教育学科の理念そのものであった。

その意味で、1993年8月、26年ぶりに立教大学で開かれた日本教育学会大会で、実行委員長として活躍された先生が、全体シンポジウムのテーマを迷わず「共生と教育」とされたのは、今にして思えば象徴的なことだった。当時まだ聞き慣れなかった「共生」という新しい関係論の構築のなかに教育的価値観を見いだそうという着想は、時代を先読みするセンスのよさばかりでなく、室教育学の理念追求の姿勢にはかならなかつたのである。

教育とは、「促し、励まし、見守り、支える」相互の営みという室先生のことばは、先生の「文化」実践の結晶であり、室ゼミを超えて卒業生の胸に深く刻まれている。そのことばのなかに先生の温かいお人柄と一貫した哲学とが凝縮されていたように思う。

先生、安らかに眠りください。